



OVERSEAS

Kyrgyz Republic —キルギス共和国—

海外事情



オシュ市—中央アジアの真珠



アブドゥカディオフ・ラスルベク ABDUKADIROV RASULBEK
株式会社片平エンジニアリング・インターナショナル/開発業務本部

キルギスタン第2の都市オシュ

キルギスタンは中央アジア諸国の一つで、かつてはソビエト連邦だった。面積は巨大ではないが、極小でもない。国土は高くそびえ立つ美しい山々に囲まれ、冷たく清らかな水に洗われ、鬱蒼とした緑の森に覆われている。この国は、手つかずの大自然と近代文明という正反対の要素が混在する、世界でただ一つの国であろう。だがここでは私の町オシュを紹介したい。長い物語を秘めた町、珍しい風習や伝統など興味が尽きない町なのだ。

オシュはキルギスタンの7州の内

のひとつで、キルギスタン南部のフェルガナ盆地の近くに位置する。州都オシュ市の最大の特徴は、3,000年以上もの歴史を持つ町だということだ。人々は「オシュの町は神の祝福を受けた世界最古の都市だ」と信じ、研究者は「オシュにはローマに並ぶ歴史がある」と言う。ここは古代シルクロードの要衝で、交易の町として栄え、売買交渉や物々交換が盛んに行われていた。隆盛を誇る貿易商であれば、活気と興奮あふれるこの町を一度は訪れたいと願う、そんな町であった。現代のオシュの街角にも、シルクロード時代の繁栄と

喧噪の名残を感じるができる。

現代のオシュは、首都ビシュケクに次ぐキルギスタン第2の都市であり、南部最大の都市とされる。オシュという名を初めて聞く人は、想像してみしてほしい。世界のどこかに緑あふれる土地がある。中央には不思議な山がそびえ、山のふもとには森林でなく近代的な建物が広がっている。車の騒音が、盆地を流れる川によってかき消される。興味深い風習、様々な民族衣装。人々は親切で、やや保守的だが近代化も進みつつある。町の入口にある美しいアーチ型の門をくぐった旅人はいつで



写真1 オシュ市の入り口



写真2 オシュの街の風景



写真3 民族衣装



写真4 ウイ

も歓迎される。世界80カ国以上の人々が住み、誰もが街に溶け込める——それがオシュだ。

霊峰スレイマン山

オシュの歴史は、この町の中心にそびえる山の歴史と深く関わっている。他の山と連なっていないこの山は、ソロモン王になぞらえてスレイマン・トーと呼ばれる。この山こそがオシュの町の中心だ。古くから伝わる話によると、大昔、この町を通過していたソロモン王がこの山を見て、あまりの美しさと素晴らしさに感動して登りたくなかった。いざ頂上に着くと、眼下には見たことのない絶景が広がっていた。オシュ発展の可能性に最初に気づいたのはソロモン王だったのだ。王は山頂から美しい谷を見下ろしたとき、ここに王宮を構えたと決めた。だがその土地に水がないことを知ると、王は水の恵みを

与えるよう、神に祈った。そうして現れたのがアク・ブーラ川だという。川はこの盆地全体を囲むように流れ、清らかな水を与えてくれる。王は神に感謝するため、山頂にモスク(神の家)を建て、終生、そこで神を愛し敬った。

ソ連時代、つまりキルギスタンがソビエト連邦の共和国だった頃、スレイマン山は体制に抵抗する者や貴族の処刑場であった。兵士が聖職者たちを処刑しようとしても、奇跡が起きて彼らはなぜか死ななかったという言い伝えもある。スレイマン山は霊峰だと信じていた。純粋な心で神を信じる敬虔な人を、この山は守ってくれると、誰もが信じていた。

これらの話が本当かどうかは分からないが、今日でも世界の数十億人がスレイマン山を聖なる山だと信じている。2kmにわたって連なるこ

の山からはオシュの町を一望できる。山頂にはソロモン王が建てたバブル・モスクがあり、世界中からイスラム教徒が巡礼に訪れて神の加護を祈る。何百万もの女がやってきては子宝と健康を、何千万もの男がやってきては神の助けと成功を祈り、そして何億もの人がやってきては神を崇拝する。今日、スレイマン山は世界遺産に登録されている。

キルギスの家

オシュの特徴と言えば、その伝統と風習だろう。楽しいものもあれば、不思議なものもあるが、どれも素敵で面白い。キルギス人は長い歴史を持つ民族だ。ソ連時代の前までは遊牧民であり、山あいで何百頭もの家畜を追って生活していた。いつも移動し続けているので、家もなく、建て方も知らないほどだった。冬の凍える寒さや夏のうだるような暑さをしのぐのは、「灰色の家」「キルギスの家」と呼ばれる「ボズ・ウイ」「キルギス・ウイ」だ。槌や釘等の工具がなくても建てられる、世界に例を見ない住宅とされる。ごく普通のロープと材木を組み立て、羊毛のできた長い布を巻けば、わずか1~3時間で完成する。ここは地震がないので、近代建築よりも安定している。



写真5 スレイマン山



写真6 バブル・モスク



写真7 民族帽子 (カルパック)

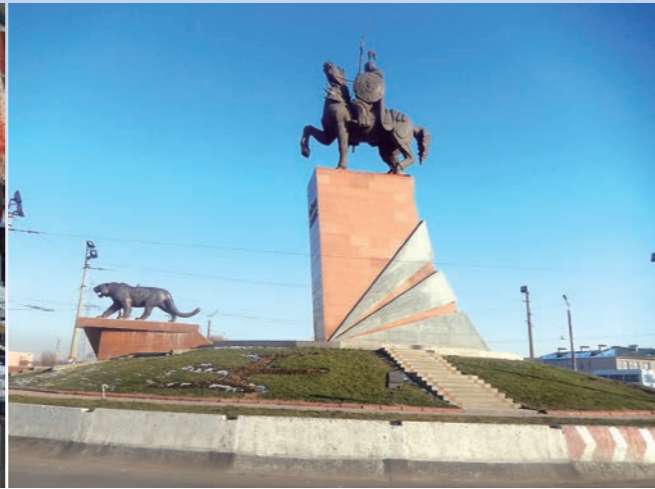


写真8 マナス王像

冬は暖かく、夏は涼しい。内部は上下に分かれ、上階は男たちのスペース、下階は厨房があり女たちのスペースだ。

オシユの男性

古代から現代に至るまで、オシユでは男性は一家の長として特に尊重されてきた。カルパックを頭に載せ、侵略者から国を守るのがマナス王の時代から変わらない男たちの役目だ。『マナス王の物語』は世界最長の叙事詩で、世界100カ国語以上に翻訳されている、キルギス人の誇りだ。この叙事詩の最大の特徴は、文字を紙に書くという記録手段が登場するまでの何千年にもわたり、世代から世代へと口承で受け継がれてきた点にある。最近になって、オシユ空港に近い市内に、マナス王をたたえる巨大モニュメントが建設された。その姿はまるで、オシユの町を訪れるすべての人を歓迎しているかのようだ。男たるものは勇敢で信頼されるべきであり、妻を大事にし、家族の必要とするものをすべて調達するのが務めである。それでこそ真の英雄になれるのだ。

カルパックとは、キルギスタンの男性がかぶる伝統的な帽子で、羊毛

でできている。羊毛は寒い時には暖かく、暑い時には風通しがよく、オシユをはじめキルギスタン全体で非常に大事にされている。カルパックは三角形で、アラ・トー山脈を模している。山のように、空に向かってまっすぐかぶることで、テニル（神）への敬意を示す。三つの面すべてにキルギスの伝統的な刺繍が施されており、キルギス文化の美しさを見ることが出来る。改まった場——結婚式、葬式、あるいは誕生日などの折に、男性にはカルパックが贈られる。オシユの町が年々変化を続けるなか、カルパックを日常生活でかぶる人もやや減ってはいるものの、男性なら2個はカルパックを持っていることだろう。

オシユの女性

オシユの女性は近代化しているが、決まり事としての伝統にはみな従っている。オシユの女性にとって最も重要な役割、それは家庭と家族の中心となって、暖かい雰囲気を作り出すことだ。女性は山の清水のように純潔なまま、夫となる人の家に嫁がなくてはならない。夫だけでなく親族全員を敬い、夫の親族や家族を名前では呼んではならない。家

事をすべてこなし、良き妻、母、嫁でいなければならない。妻となる女性は、ジュルックと呼ばれるスカーフを頭に巻くことで、既婚者であることを他人に示す。ジュルックの色は、純潔と優しさを象徴する白だ。

最も興味深く不思議なこと

ここでは「家族」は特別な意味を持つ。家族は人生で最も重要だ。親は最期まで子の世話をし、子も最期まで親の世話をする。親を介護施設に預けることは最大の恥とされ、大きな噂になってしまう。キルギスには「結婚は天が決めるもの」という諺があるが、家族に対するキルギス人の考え方をよく表していると言えよう。家族という人生の重要な環においては「結婚」、そして伝統行事や風習が非常に大きな位置を占める。そのなかでも最も興味深く不思議なことは、オシユで結婚するには、男は結婚したい相手の両親から花嫁を買うための結納金を用意し、300～500人もの客を最高のレストランに招いて祝宴を行わなければならないことであり、また女はタオルから家具まで必要なすべてのものがそろった新居を用意しなければならないことだ。さらには、双

方の両親や親族に夏服と冬服を買う金も用意しなくてはならない。オシユの結婚式は2日間にわたって行われる。1日目は家で行い、近所の人や老人の祝福を受ける。2日目は市内の大きな有名レストランで友人を招いて行い、踊ったり、高価なウェディングドレスを見せびらかして称賛を受けたりしながら楽しい時間を過ごす。こう聞くとオシユで結婚するには莫大なお金が必要だと感じられるだろうが、互いに親戚が大勢おり、祝い金をくれるという幸運な風習がある。実際、キルギスでは新婚夫婦に物を贈る人は少ないため、祝い金の風習によってこのような結婚式が成り立つと言っていい。祝い金だけで結婚式の支出をまかなえることもある。

誘拐婚

貯金が足りないが今すぐ結婚したい、そんな人たちのために、先祖が考え出した風習が「誘拐婚」だ。「誘拐」という言葉は穏やかでないしショックを受ける人もいるかもしれないが、それには及ばない。誘拐婚とは、愛し合っているものの、お金のない二人が、一緒に暮らして子供をもうけたいと思う場合に限りで行うものだ。現在では誘拐婚は違法だが、誘拐婚を行ったことで男性が逮捕されるケースはごくまれだ。その理由は、現在の誘拐婚のほとんどが男女両方の合意のもとで行われるからである。誘拐婚をした男女の80%は結婚式を行い、1～3年あるいは10年たてば、幸せだと思うようになる。誘拐婚は二つの愛し合う心が結びつく唯一の方法であり、愛し合う二人にとって豪華な結婚式は必要ない。それに人々は、一度誘拐された女性は、実家に戻っても、その後幸せになることはない信じ



写真9 粘土の釜で焼くナン



写真10 焼きあがったナン

ている。このため、若い男と女が恋に落ち、親が結婚に同意しない場合、二人がこの伝統に従って一緒になれば、親は結婚に同意せざるを得ないのだ。よくできた仕組みではないだろうか。ロマンチックな雰囲気壊さないためにも、誘拐婚の暗い部分にはここでは触れないでおこう……。

オシユの食生活

キルギス人は遊牧民で、動物の肉以外には食糧がなかったため、今でも羊、牛、馬の肉は人々の大好物だ。馬肉は高価で、特別な日以外はめったに食べない。幸か不幸か、馬肉を食べられる余裕のある人は少ない。何より馬はキルギス人にとって、大事な移動の足なのだ。肉以外では、粉をこねたものが好んで食べられる。興味深いのは、動物性脂肪を非常に多く摂っているのに、肥満に悩む人はいないことだ。おそらくオーガニックな食べ物のみを摂っており、加工食品はほとんど口にしないからだろうと私は考えている。

オシユの食の基本はナンだ。このナンは丸形で、オーブンなどではなく、粘土の釜で焼く。キルギスには、「オシユの人々はあらゆるおかずとナンを食べる。ナンをおかずにナンを食べる」というジョークがあるほどだ。飲み物は紅茶か緑茶がよく飲まれる。つまり、オシユの人々の普段の食事は、お茶、ナン、黄色のパタ

ー（サル・マイと呼ばれるキルギスの伝統的なバター）、そして多くの野菜だ。オシユは肉と動物性脂肪を多く摂取するキルギスタンのなかでも唯一、野菜を多く食べる地域とされる。その理由として、オシユには80もの国から人々が集まるため、そうした地域の人たちが野菜を食べる習慣を持ち込んだと考えられる。オシユの人々は野菜不足だとも思ったのかもしれない。

こうしたこと以外にも、オシユの町には古代の習慣が残っている。それが山のほど近くにあるバザールだ。好みに合わせて、欲しいものを何でも見つけることができる。バザールに行けば、古代の商人の気分を味わえ、往時の交易や商いの雰囲気を肌で感じることができるだろう。

オシユを訪れることがあったら

話はまだまだ続くが、オシユの町の物語は膨大で、ここに書いたことはその1/5程度に過ぎない。それもそのはず……考えてもみてほしい。3,000年もの歴史を持つ町にはどれほど多くの文化や伝統が伝わっているのかと。オシユを訪れることがあったら、そこでは美しい伝統衣装を身にまとった人だけでなく、その人なつっこさ、親切さ、そして古代から伝わる文化と伝統にも、出会うことができるはずだ。